

令和7年度 岩手県民俗芸能フェスティバル

岩手の大地に舞う

＜出演＞ 沼宮内南部駒踊り(岩手町)
北山伝統さんさ(盛岡市)
早池峰嶽流平倉神楽(遠野市)
女鹿神楽(一戸町)

大宮神楽(田野畑村)
伊藤流行山鹿踊り(奥州市)
花輪鹿子踊り(宮古市)

＜特別出演＞ 春日流花農鹿踊(岩手県立花巻農業高等学校)

QRコードからアクセスすると、公演の動画をスマートフォン等でもご覧いただけます。

●YouTube「2025岩手の大地に舞う公式ch」



12月13日(土)

開場12:00 開演13:00

**トーサイクラシックホール岩手
(岩手県民会館)**

入場無料 (一部を除き自由席)

※内容については一部変更になる場合があります。

主催／岩手県・(一社)岩手県文化財愛護協会

共催／(公財)岩手県文化振興事業団・岩手県民俗芸能協会

後援／岩手県教育委員会・(一社)岩手県芸術文化協会・(公財)岩手県観光協会

(公財)盛岡観光コンベンション協会・岩手県高等学校文化連盟・岩手県中学校文化連盟

岩手県高等学校長協会・岩手県中学校長会・岩手県教職員組合・岩手県小学校長会

岩手県高等学校教職員組合・(一社)岩手県PTA連合会・(一社)岩手県私学協会

岩手日報社・IBC岩手放送・テレビ岩手・NHK盛岡放送局・めんこいテレビ

岩手朝日テレビ・岩手ケーブルテレビジョン・エフエム岩手・ラヂオ・もりおか

お問い合わせ (一社)岩手県文化財愛護協会

〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34(岩手県立博物館内)
TEL & FAX: 019-661-9688 E-mail: ib.aigo@k6.dion.ne.jp



令和6年度岩手県民俗芸能フェスティバルより

出演団体紹介

沼宮内南部駒踊り (めまくないなんぶこまおどり) (岩手町)

昭和10年頃、当時の沼宮内町長らが馬産地のゆかりで、玉山村外山の方々を招いて、駒踊りの指導を受けたのが始まりとされています。駒踊りは、旧南部藩領内を中心に広く分布する芸能で、馬産地らしく勇壮かつ馴染み深い馬との共存を謳歌する芸能です。

沼宮内駒踊りは、回旋する動きの速さと、体のくねりに特徴があります。二戸地方の鹿踊りや七つ踊りに共通のササラ摺りの役目が大変重要になっています。

大宮神楽 (おおみやかぐら)

(田野畑村)

大宮神楽は鎌倉時代の延元2(1337)年、当時大宮神社の別当で、羽黒派山伏の栄福院によって伝えられた山伏神楽です。

田野畑村羅賀に鎮座する、大宮神社の大宮大権現獅子頭を奉じ、人々の健康を祝し、無病息災、家内安全、悪魔払い、火伏、五穀豊穡、商売繁盛、大漁成就など厄を払う願いの込められた祈禱の舞をする神楽です。

大宮神楽はテンポが早く、三拍子のリズムに乗り躍動感あふれる勇壮かつダイナミックに舞うのが特徴です。

北山伝統さんさ (きたやまでんとうさんさ) (盛岡市)

盛岡市北山には、江戸時代から南部家の墓地を中心に、聖寿寺、東禅寺、法泉寺の三つのお寺があり、夏になるとお寺の山門の前で、先祖供養のための踊りが行われていました。明治9年、明治天皇が東北ご巡幸の際、盛岡八幡宮にてご高覧に供したことが伝えられています。

明治41年、この盆踊りは「三門前踊り」と呼ばれる組織として改めて発足しました。これが現在の「北山芸能保存会」の起源です。

衣装には南部家の定紋「向い鶴」と甲斐の武田氏にルーツを持つ南部家の裏家紋「武田菱」が染め上げてありますが、昭和44年に、南部俊英さまから直々に使用許可をいただいたものです。

伊藤流行山鹿踊り (いとうりゅうぎょうざんししおどり) (奥州市)

この踊りは、300年以上前(元禄13年頃)に宮城県本吉郡水戸辺村の伊藤伴内持遠により始められ、品川様(三代伊達綱宗公 江戸屋敷名)上覧の際、「大変行山な踊り也。」とほめられ、褒美として九曜の紋を拝領、お抱えのおどりとして踊られ、東磐井郡相川村、田河津村を経て、羽田村に伝承され、昭和35年に旧水沢市から無形民俗文化財に指定されました。

装束には鹿頭の威厳さと、中立、女鹿の咽印(輪違い)等は、特に珍しい存在で、踊りには勇壮な中にも優雅さがあり、バチ捌きや足捌きが細やかで行山流の正統派を継ぐ踊りとして現在に引き継がれています。

早池峰嶽流平倉神楽

(はやちねだけりゅうひらくらかぐら)

(遠野市)

遠野市上郷町平倉地区に伝承されている神楽で、明治34年に、現在の遠野市宮守町の塚沢神楽から伝わったものです。塚沢神楽は国指定重要無形民俗文化財である花巻市大迫町「岳神楽」の弟子神楽であり、平倉神楽は岳神楽の孫弟子にあたります。戦後衰退し、昭和30年代には細々と神楽が行われる程度でしたが、昭和63年保存会を組織して活動を開始し、遠野まつりに参加し、平成12年には幕神楽の再興に着手する等、研鑽を重ね現在では31演目を習得し今日に至っています。

花輪鹿子踊り (はなわししおどり)

(宮古市)

鎌倉時代、根城館に居を構えた閉伊頼基の家臣で、花輪次郎なる者が芸を好んで旅をし、越後から習い覚えたのが始まりと言われています。

寛永8(1631)年には、花輪殿様として知られる盛岡藩主、重信公が花輪より盛岡に召される時のお供に付き、盛岡城で鹿踊りを披露して、南部家の家紋(九曜紋と向い鶴)の使用を許されたと言われています。また、宝暦年間(1751年～1763年)には、花輪に生まれた踊りの名手、伊藤佐吉がさらに工夫を重ねて格調ある踊りに完成させたと言われています。

幕踊り系の鹿踊りに分類され、鹿子の踊り手は、一番大夫から三番大夫、雌鹿子、おさえ2人、側鹿子6人の12人、太鼓は2人から3人で構成されています。

女鹿神楽 (めががぐら)

(一戸町)

女鹿神楽は、上女鹿沢の「三明院(山伏)」を発祥とする町内他の神楽ととても良く似ています。そのため、女鹿神楽の源流も三明院に有ると考えられています。かつて女鹿地区は、三明院の霞(山伏の支配地域・縄張り)でした。山伏は、地域の社などに付随する行事なども執り行い、地域住民の生活と深く結びついていました。女鹿に神楽がいつからあったかは定かではありませんが、江戸時代後期には近隣の集落に神楽が伝承されているため、女鹿神楽も存在していたのではないかと思います。

〈特別出演〉

春日流花農鹿踊 (かすがりゅうはなのうししおどり) (岩手県立花巻農業高等学校)

花巻農業高校鹿踊部は、花巻市東和町「春日流落合鹿踊保存会」のご指導を仰いで始まり、創設67年目となります。現在、部員24名で週6日練習に取り組んでいます。例年は、地元の祭りや老人施設の慰問など年間約20回の公演を行っています。また、県内外から本校の羅須地人協会を訪れる方々に演舞を披露することもあります。鹿踊の起源は諸説ありますが、鹿の供養から始まり、五穀豊穡祈願が舞踏化された芸能です。長さ2.4mの「ささら」を背負い、総重量15kg程ある装束を身に着け、太鼓を打ちながら謡い踊ります。



■ トーサイクラシックホール岩手 (岩手県民会館) アクセス

盛岡市内丸 13-1 (TEL019-624-1171)

□ JR 盛岡駅よりバス

「バスセンター」行 県庁・市役所前下車・徒歩2分

□ お車をご利用の場合

県民会館及び周辺の有料駐車場をご利用ください。